

京都大学医学部附属病院将来構想 2013

京都大学医学部附属病院

平成25年9月

目 次

はじめに	1
京都大学医学部附属病院の将来構想について（主旨）	2
I. 診療	3
1. 医療の提供について	
2. 診療組織、規模について	
II. 研究	4
1. 京大病院が目指すべき研究の在り方について	
2. 臨床研究推進のための取組について	
3. 研究環境について	
4. 「研究病院」の地位確立について	
III. 教育	5
1. 教育的視点について	
2. 医師の教育・育成について	
3. 医師以外のメディカルスタッフの教育・育成について	
IV. 地域貢献・社会貢献	7
1. 地域医療と社会貢献について	
2. 医師の供給について	
3. 医師以外のメディカルスタッフの供給について	
4. 地域医療の拠点としての役割について	
V. 国際化	8
1. 病院間交流協定の促進	
2. 国際展開力の強化	
VI. 運営	9
○ 京都大学医学部附属病院将来構想 2013 改訂	10

京都大学医学部附属病院の将来構想について

はじめに

本院の将来構想は、法人化直前の2004年に作成された「京都大学病院将来構想」が嚆矢である。「病院基本理念」を基に「基本構想」を策定し、組織・管理運営体制、臨床教育、臨床研究、診療体制、患者サービス及び施設の現状と整備計画などについて、具体的な目標が詳細に取りまとめられている。その後、法人化・新研修医制度など周囲を取り巻く状況の変化を受けて、2007年に全面的に見直され、この将来構想を基盤として、京大病院は様々な組織改革に取り組み、医療・研究・教育のいずれにおいても目覚ましい発展を遂げ、ここ数年間で経営的にも安定してきた。

しかし、近年大学病院に求められている「高度急性期医療の推進」と標準的医療を基盤とした「高度先進医療」をどのように両立させ得るか、国際基準による新規医療の開拓・再生医療への貢献など、研究病院としての使命をいかに発展させていくか、優れた医療人・研究者の育成や、病院の地域貢献・社会貢献をどのように充実させるか、さらに医療の国際化をどのように推進させるべきかなど、多くの重要課題が山積している。これらの課題を、極めて具体的な短期・中期的展望のみならず、「数十年後の京大病院のあるべき姿」という高邁な視点に立って改訂されたのが、今回の「京大病院将来構想2013」である。

今回の将来構想は、巻末に記したメンバーにより、2013年上半期に取りまとめられたものであり、この将来構想によって京大病院がより一層の発展を遂げ、世界屈指の施設として、医療に大きな貢献をし続けることを祈念する。

平成25年9月
京都大学医学部附属病院
病院長 三嶋 理晃

京都大学医学部附属病院の将来構想について（主旨）

I. 診療

高度急性期医療の推進と並行して標準的医療を基盤とした高度先進医療との両立を図り、国立大学法人の附属病院として使命を果たすとともに、患者中心の開かれた病院として、安全で質の高い医療を提供する。

II. 研究

国際基準による新規医療の開拓、iPS細胞をはじめとする再生医療への貢献、革新的な医療機器開発の促進、臨床研究情報の集積をもって「京大病院」としての使命を果たし、新しい医療の開発と実践を通して社会に貢献する。

III. 教育

優れたメディカルスタッフの養成を行うとともに、優秀な教育者及び研究者を目指した専門職継続教育を行うことにより、人間性が豊かで、各分野で中核となる人材を育成する。

IV. 地域貢献・社会貢献

病院機能の分化が叫ばれている中で京大病院が担うべき役割を明確に示し、関係病院との連携を強化するとともに地域各自治体との医療行政上の連携や地域の医療機関との連携の整備・充実を図る。

V. 国際化

海外の病院との交流協定を促進し、メディカルスタッフの交流や情報の交換を通して国際的に活躍する人材の育成を行うとともに、双方の医学水準の向上を図る。また、国際水準に準拠した臨床研究の推進により、日本発の革新的な医薬品・医療機器の創出等を目指し、国際社会にアピールしていく。

VI. 運営

「京大病院」としてその使命を果たすべくグランドデザインを掲げ、行動計画と評価制度によるPDCAサイクル（Plan-Do-Check-Act）により、社会状況や時代のニーズに柔軟に対応した形で、「京大病院」として担うべき責務を全うしていく。

I. 診療

高度急性期医療、標準的医療を基盤とした高度先進医療との両立を図ることが京大病院としての使命であり、京大病院が誇る各専門分野の一層の充実を図るとともに、横断的に先進的な医療を提供できる体制の確立も必要であると考えている。また、平成24年度に臨床研究中核病院に選定され、臨床研究の成果を臨床応用まで進めるための拠点として、臨床研究総合センターなどと連携し、診療基盤が確立されるまでの支援を行っていく。

1. 医療の提供について

(1) 京大病院は高度な急性期医療・先進医療を推進すべきであるが、標準的医療とのバランスをどのようにするかを常に考慮することが重要であり、また、以下の点を検討することが必要である。

- ① 大学病院の使命として、ハイリスクな先進医療の実施と急性期における高度医療の提供を行うこと
- ② 難治性疾患に係る対応を積極的に受け入れ、新規治療法の開拓など、大学病院としての使命を果たすこと
- ③ 専門性が高く、高度な医療を横断的に提供できる体制を確立すること
- ④ 診療現場における Common Diseases の取扱いについては、その専門的要素も鑑み、医師養成の観点や地域連携モデルの創出を視野に入れた取組を行うこと
- ⑤ 京大病院として担うべき役割を明確にし、関係自治体の協力を得て、診療別、疾患別及び療法別の関係病院及び地域との機能分担を押し進めること

(2) 急性期医療体制の明確化と重点化に当たっては、次のこと等に対する、一定の配慮も必要である。

- ① ヘリポートの活用と「京大病院」としての救急医療体制の確立
- ② 集中治療室における機能の分化
- ③ 各診療科における患者のメンタルな側面からのケアの実施
- ④ 緩和ケアやホスピス、かかりつけ医や医療・福祉・介護などとの地域連携の実施
- ⑤ 移植医療を支える体制整備
- ⑥ 医療安全及び感染対策を支える体制整備

2. 診療組織、規模について

(1) 現在の臓器別診療科中心の診療体制の見直しにより、横断的な医療の提供を実施する体制の確立と、将来の新規診療体制の在り方を模索すべきである。

- ① 「がんセンター」の充実
- ② 小児医療を横断的に行う「小児医療センター」の設立

- ③ 周産期医療の充実を図る「周産期センター」の設立
- ④ 生活習慣病における合同チームの編成
- ⑤ 必要に応じたユニット化・センター化への柔軟な対応

(2) 最適診療規模は、今後の種々の要因によって左右されるが、おおむね 1,100 床程度が、京大病院の使命を果たすのに適当であると考えられる。

II. 研究

従来、大学病院における臨床研究は、診療行為と不可分の関係で、表裏一体となって進められてきていたが、本院においては、平成 24 年に臨床研究中核病院に選定され、翌年には、研究の中心的役割を担うべく、治験管理センター、探索医療センター、EBM 研究センターを統合し、臨床研究総合センターを発足させた。また、iPS 細胞研究所と共同し、iPS 細胞等の医学・医療への応用を目指して臨床開発を行っていくための iPS 細胞臨床開発部を病院内に設置し、iPS 細胞外来として疾患特異的 iPS 細胞をもとに、再生医療用 iPS 細胞作製のための組織提供を受ける窓口を設け、再生医療の更なる発展を目指しているところである。

他に、平成 23 年には産学連携拠点として先端医療機器開発・臨床研究センターが設立され、革新的な医療機器の迅速な実用化を図るとともに、医療機器開発を担う人材育成を目指している。

1. 京大病院が目指すべき研究の在り方について

京大病院の大きな魅力、存在意義の一つは臨床研究であり、次のような基本的な考え方を踏まえ、臨床研究を推進するための仕組みの構築が必要である。また、診療の中で新規医療の開発も重視すべきである。

- ① 限られた病院の資源の中から、いかにして多くの資源を研究に投入できるかを常に考慮する。
- ② 主体性を保ちつつ外部資金を導入することが重要である。
- ③ 臨床研究の段階では、各診療科、講座の研究者の自主性を尊重しつつ、研究成果の応用の直前からは、病院として選択的、重点的な支援が必要である。
- ④ 臨床研究中核病院として、臨床研究のハブとして機能できるよう、人的・情動的ネットワークの確立が必要である。

2. 臨床研究推進のための取組みについて

これまで京大病院では移植関係が臨床的に脚光を浴びていた分野であったが、今後、先進医療、新規医療として、これに続く分野を見出し、資源投入を行なっていく仕組みを構築しなければならない。

- ① 臨床研究中核病院としての成果を出すべく、各種臨床試験や先制医療の

実現基盤となるコホートスタディ等の疫学的研究を推進する。さらに、人材育成面での自立を含め、臨床研究総合センターの一層の強化・充実を行う。

- ② 基礎研究の次のステップとして、臨床への橋渡しの研究への資金の確保を京大病院の重要な課題として取り組む。
- ③ 診療とのバランスを取りながら臨床研究に従事するということが重要であり、そのための仕組みとルール作りを行う。
- ④ 臨床研究や臨床応用を推進するための情報基盤の整備を行い、情報の集積・再配分を実現する。

3. 研究環境について

臨床研究の分野では、“世界初”というような全く新しい研究開発やある程度普及した療法の適用症例の拡大、応用開発など、様々なレベルの研究が混在しているような研究環境が望ましい。

また、今後、優秀な人材の確保という観点から、先端的研究の評価システムの確立や特任教員の次のステップの確保等研究者の流動性の促進に向けた新たな制度の構築など、長期的な視野で研究環境の整備や制度作りが求められる。

4. 「研究病院」の地位確立について

国立大学病院の使命に「研究」の推進があるが、京大病院においても新規医療の開発は責務である。臨床研究総合センターでの成果をもとに国際基準で臨床研究を遂行する「研究病院」としての基盤整備、研究費や人材の確保等を確立していく必要がある。

Ⅲ. 教育

メディカルスタッフの養成においては、必要な知識・技能・態度を身につけさせるようなきめ細かい臨床教育を行う必要がある。一方、各分野でリーダーとして活躍する優れた人材も数多く輩出してきており、京大病院においては、優れたメディカルスタッフの育成にとどまらず、優秀な教育者及び研究者としての育成も図り、それぞれの分野で中核となる人材の養成が今後も求められている。

1. 教育的視点について

それぞれの分野で中核となるメディカルスタッフとして、かつ優秀な教育者及び研究者として育成するには、臨床の現場における卒前教育、卒後教育及び生涯教育の各ステージを効果的に行っていくことが重要であり、具体的なシステムを構築する必要がある。また、チーム医療を教育の場に積極的に取り入れる必要がある。その他、E-Learning や講義のオンデマンド配信等による他の臨床研修病院などの施設との連携構築も進めていくべきである。

2. 医師の教育・育成について

本学の特徴である自主自由の学風は維持しつつ、卒前教育においては、全ての学生にきめ細かい臨床教育を行う。卒後教育においては、卒後臨床研修修了後の専門医コースと臨床系大学院の位置付けを明確にする。

(1) 卒前教育

- ① 「グローバルスタンダード」に対応していくため、医学部との連携を強化し、卒前教育の全面的な支援を行っていく。
- ② グローバルなリーダーの育成を目指し、海外での臨床実習派遣及び海外からの学生の臨床実習受け入れなどを積極的に取り入れて学生のモチベーションを高め、その能力を伸ばす教育環境作りを行う。

(2) 卒後教育

- ① 安全な医療を求める社会の要請に応え、基本的診療能力を備え専門医研修に連続する初期臨床研修の充実を図る。
- ② 専門医コースでは、高度・先進医療を推進する京大病院の利点を取り入れた、魅力的な専門医育成プログラムを実行する。また、関係病院との人材交流を密に図り、専門医育成を通して地域医療のレベルアップに貢献する。
- ③ 臨床系大学院では、各領域におけるリーダー育成の観点から、専ら研究を行うべきであり、研究テーマとは無関係な診療業務には基本的に従事させないことが望ましい。

3. 医師以外のメディカルスタッフの教育・育成について

メディカルスタッフの教育・研修に関しては、従来のような個々の研修教育現場依存の体制から、総合臨床教育・研修センターを中心とした統合的体制で実施する。その上で、各分野の中核となる人材の育成も行う。

(1) 卒前教育

- ① それぞれの国家資格に則したきめ細かい臨床教育を行う。
- ② リーダー育成を目標とした教育環境づくりを行う。

(2) 卒後教育

- ① 京大病院の使命を考え、各分野のリーダーとなるべき専門分野に特化したメディカルスタッフ、新規医療開発に従事する人材の育成に一層努力する。
- ② キャリアパスを支援するための職員の再教育や人事上の流動性の促進を図る。

IV. 地域貢献・社会貢献

病院機能の分化が叫ばれている中で京大病院が担うべき役割を明確に示し、関係病院との連携を強化するとともに、地域各自治体との医療行政上の連携や地域の医療機関との連携の整備・充実を図る必要がある。また、開かれた病院であることを基本理念の一つとしている本院においては、中長期構想を策定するにあたっては、社会貢献や一般社会との関わり合いを抜きに行うことは出来ない。

1. 地域医療と社会貢献について

(1) 京大病院が地域で担う役割を明確に打ち出し、関連自治体との医療行政上の連携、機能分化に伴う地域医療機関との連携をより一層強化する。

- ① 地域の医療機関における機能分担に係る支援と推進
- ② 地域医療計画への専門的知識の提供を通じ地域医療の充実に貢献
- ③ 情報システムを利用した地域医療ネットワークの連携強化及び地域医療支援センターにおける取組への協力と支援の強化
- ④ 医療安全や感染対策における中心的役割を果たす
- ⑤ 臨床研究・臨床医学教育のハブとしての役割を果たす

(2) 地域連携として、がん診療、救急・災害医療等医療行政において一定の役割を担う必要がある。

また、医師の人事交流、専門医の研修、臨床研究のタイアップ等新たな観点から、関係病院との連携の維持、強化が必要である。

(3) その他の社会貢献として、次のこと等に関しても、今後、一定の配慮や検討が必要である。

- ① “心の問題”などに対する医学部人間健康科学科や教育学研究科の心理学関係分野等との学際的な研究への取組み
- ② 退院後の患者に対するリハビリケアの地域連携の推進
- ③ 医療事故、訴訟の増加に伴う司法との連携の在り方

2. 医師の供給について — 関係病院の現状と今後の在り方について —

これまで、関係病院は医師の供給を中心に維持されてきていたが、新医師臨床研修制度等の導入・進展により、教育・研修上の連携の要素が強まり、大きく変化しつつあるのが現状であり、研修医や専門医の養成或いは臨床系大学院等医師養成の側面から再構築していく必要がある。

また、関係病院との連携の維持にあたっては、病院によっては、単一診療科だけではなく、複数の診療科による関係の強化が必要となる。

その他、教育面だけでの活用にとまらず、地域医療機関へ出向中の医師にE-Learningや講義のオンデマンド配信を提供し、地域派遣における京大病院のサポート体制を充実させる。

3. 医師以外のメディカルスタッフの供給について

- (1) 看護師については、今後、京大病院以外の医療機関でリーダーとなる優秀な人材や、認定・専門看護師などの需要が増え、人材の育成と供給ということが求められる。
- (2) 看護師以外のメディカルスタッフについても、他の医療機関では、治療方針をコーディネート出来る中堅のスタッフへの需要は多く、今後、これらの者を養成し、供給する体制も必要となってくる。

4. 地域医療の拠点としての役割について

- (1) 高度で専門的な医療を横断的に提供するだけでなく、がん診療連携拠点病院としてがん治療に係る診療ネットワークの強化を図り、地域におけるがん医療水準の向上を推進していく。
また、小児がん拠点病院として、小児に対する緩和ケア、思春期患者に対する対応、長期フォローアップ体制、患者・家族に対する支援、情報提供といった包括的な診療・支援体制の強化を行う。さらには、小児がん患者がどの地域に発生しても適切な医療を受けられるように、地域の医療機関と連携を図り、さらに充実した体制を整備していく。
- (2) 周産期医療として、母体・胎児集中治療と新生児集中治療を実施するための体制強化を行い、高度な周産期医療を必要とする妊産婦、胎児、新生児の受入れを促進し、地域における周産期医療体制の充実を図る。
- (3) 地域情報基盤の整備を行い、日常臨床活動のみならず、臨床研究、臨床教育に資する情報の供給源・交流拠点（情報ハブ）としての体制の強化を図る。

V. 国際化

メディカルスタッフの国際交流を通し、国際的な見識を持ち、医療人として広い視野と高い資質を持つことに加え、世界的に活躍できる豊かな国際性を有する人材の育成を行う。一方、現地指導も含めたレクチャーを行うことで、現地の人材を育成し、同国の医療レベルの向上も図るなど、京都大学における「世界に開かれた大学として、国際交流を深め、地球社会の調和ある共存に貢献する」という基本的な目標達成を実現していく。さらに、国際水準の臨床研究・医療機器開発を推進する拠点として、日本の臨床研究全体の活性化に尽力していくとともに、学内外の研究成果を臨床応用まで進め、日本初のイノベーションを世界に発信していく。

1. 病院間交流協定の促進

人的交流のほかに、シンポジウムや共同研究の実施なども推進していく。あわ

せて、国際医療に関する調査・情報収集を行い、今後の京大病院の国際貢献のためのノウハウの蓄積を図っていく。また、医療の提供体制が発展途上にある国々のみならず欧米などの先進諸国での病院間交流協定を推進する。

2. 国際展開力の強化

ライフサイエンス分野の国際産官学連携活動に参画するほか、海外の大学病院・研究機関との連携体制の整備を進めるなど、本学臨床研究シーズの価値最大化を図るためのグローバル展開を推進する。

VI. 運営

京大病院が掲げる理念を基礎に、将来構想や行動計画の策定、それを評価する制度を整備し、京大病院として担うべき責務を全うする。

- (1) 社会状況や時代のニーズによって医療に求められるものは変化するが、京大病院として果たすべき使命や役割への追及を継続し、行動計画や評価制度によって具体的に進むべき道筋を定めていく必要がある。
- (2) 医療制度改革に挙げられている平成37年の病院機能の分化をめざし、京大病院が「診療」で果たすべき役割を明確にし、スタッフや病床の効率的再配置や外来機能の分化も含めて検討していかなければならない。
また、病床機能報告制度が新たに模索されているなかで、京大病院の地域で果たすべき役割についても言及し、患者にとってもわかりやすい病棟機能のコンセプトと、医療機能の分化を掲げていく必要がある。
- (3) 高度医療の提供と、新規医療の開拓、優秀な医療人の輩出を支えるためにも、組織の盤石化と経営面での安定化を図る。
 - ① メディカルスタッフの処遇と勤務環境の改善
 - ② 診療組織への戦略的人員配置
- (4) 性別・職種に関わらず適切なワークライフバランスを保ちながら、男女共同参画のもと、継続的にキャリアパスが描ける職場環境を実現するため、24時間保育、病児保育、職員の心のケア等の体制整備を進める必要がある。
- (5) 中長期的な財政計画の立案・実行を可能とするために、事務機能の強化も必要であり、医療事務のスキルや大学病院経営に長けた職員の育成を進めていかなければならない。病院が求める人材を独自選考する仕組みや、大学病院事務のプロフェッショナルとしてのキャリアパスや人材育成プランの構築を推し進め、病院運営を下支えする人材の育成に取り組んでいく必要がある。

○京都大学医学部附属病院将来構想 2013 改訂

病院執行部構成員

病院長	三嶋	理晃	病院長補佐	平家	俊男
副病院長	坂田	隆造	病院長補佐	椎名	毅
副病院長	稲垣	暢也	病院長補佐	黒田	知宏
副病院長	上本	伸二	病院長補佐	松原	和夫
副病院長	一山	智	病院長補佐	秋山	智弥
			病院長補佐	加藤	健

病院協議会構成員

教授	高折	晃史	教授	平岡	眞寛
教授	木村	剛	教授	富樫	かおり
教授	千葉	勉	教授	福田	和彦
准教授	平井	豊博	教授	宮本	享
教授	三森	経世	教授	鈴木	茂彦
講師	武地	一	教授	伊達	洋至
教授	小池	薫	教授	羽賀	博典
教授	高橋	良輔	教授	前川	平
教授	柳田	素子	教授	藤田	潤
教授	武藤	学	教授	横出	正之
教授	坂井	義治	教授	高谷	宗男
教授	戸井	雅和	教授	清水	章
教授	吉村	長久	教授	森田	智視
教授	小西	郁生	教授	上嶋	健治
教授	宮地	良樹	教授	福山	秀直
教授	小川	修	教授	陳	和夫
教授	伊藤	壽一	教授	池田	昭夫
教授	松田	秀一	教授	小杉	眞司
教授	村井	俊哉	教授	小西	靖彦
教授	別所	和久	教授	川上	浩司

新病院整備推進室

室長	坂上	定敬	室員	後藤	安賀里
掛長	野村	俊介	室員	田村	洋輔
			室員	宗近	洋子